

多様化するイスラムのかたち——「俗人化」のもたらす可能性

八木 久美子

「私は自分のことを宗教的な人間だと思っています。ですが、私はコーランについて話すシェイフの前で人生のすべてを過ごそうなんて考えませんね。あの人たちの話し方は好きではありません。退屈なんですよ。当たり前です。シェイフが話しているのを見るのが好きでなくても、それがイスラムに反していることになるなんて思いません。」¹

こう語ったのは、イスラムを専門とするアラブの衛星放送のテレビ局、「リサーラ」の幹部である。彼は二〇〇六年に始まったこのテレビ局の方針を説明する際に、なにげなくこうつけ加えた。大胆にも聞こえる彼の発言の背後には、実は現代のイスラム教徒の多くが共有する感覚がある。イスラムに特化したこのテレビ局は、新しい感覚を持ったイスラム教徒にターゲットを合わせ、彼らが必要とする情報をわかりやすく、そして楽しめる形で提供することを売りにする。

アラブ世界でも衛星放送は急成長を遂げている領域であり、今や、顧客の獲得をめぐる複数の局が競合する状況だ。「リサーラ」をはじめとするイスラム専門チャンネルも市場原理の支配から逃れられない。イスラムに特化するにしても、それをどのように提示するかが問われ、その成否が商業的な意味を持

つということである。

言い換えるとイスラムに関して、多くの選択肢のなかから好きなものだけを選びすぎて視聴するというショッピングの感覚が人々の間に生まれているということだ。宗教番組とさえお決まりのように伝統的な服装をした年配のウラマーが画面に登場し、家父長的な態度で威厳をもって語っていたのは、すでに遠い過去の話だ。今や、ムハンマドの教友の物語をテーマにした時代劇のようなものもあれば、軽妙な口調で自分のコーラン解釈について語りあうトークショー的な番組まで様々だ。地上波しかなく放送が政府の完全な統制下に置かれていた時代はすでに遠く、電波を通して提供されるイスラムの姿は、以前とは比べようもないほどに多様化している。

ここで着目したいのは、従来のスタイルとは異なるスタイルでイスラムを論じようとする人物が登場し、かつそれを歓迎する多くの人々がいるという事実だ。本論では新しいタイプの説教師たちの例を取り上げるが、彼らの活躍の場はテレビだけでなく、講演会の開催はもちろん、その他にもインターネット上の動画やビデオなどのメディアを駆使して人々に語りかけている。彼らの現代風の派手なパフォーマンス、商業的な成功を見ると、イスラム版テレヴァンジェリストと呼ばれることが

あつても、あながち的外れとは思えない。

さらに注目したいのは、こうした説教師たちの活躍を支える中心となつているのが、社会の中で中流以上に位置し、西洋的な文化や生活様式に親しんだ階層であるという点だ。一九七〇年代以降、イスラム復興が顕著になるなかでも、こうした階層は、イスラム復興現象から遠いところに位置するとこれまで考えられてきた。しかし実際には、この階層もイスラムを忘れて去つたわけでもなければ、拒否感を示しているわけでもなかったのである。イスラム復興を経済的不満、社会的剥奪感にのみ帰すことが無効なのはすでに明らかだ。経済力や社会的影響力を持つば、イスラムに対する関心を失うということではなく、イスラムに対する別のニーズを持つようになる。そしてそれに応えるような説教師が登場し歓迎されているということなのである。同じイスラム教徒であっても人々の生き方が多様化するれば、イスラムから求めるものもまた多様化する。

それを踏まえたうえで、ひとつ考えなければならぬことがある。イスラムの新しい形が求められるとして、その担い手となるのは誰か。注目したいのは、こうした新しい説教師たちが一般的にイスラム諸学の専門家であるウラマーとは認知されてはいないということ、そしてそれにもかかわらず、説教師として職業的に成功しているという点である。伝統的なウラマーではないことが聴衆にとって負の意味を持っていない。

たしかにムスリム同胞団を設立し、その後のイスラム主義運動の礎を創り上げたハサン・アル・バンナーもウラマーではなかった。ダールル・ウルームという師範学校でイスラムについてある程度の教育を受けたとしても、それはアズハルの伝統的

な専門教育とは異なる。近代のイスラムを特徴づけるのが「俗人」の主體的な動きであるというのは、すでに繰り返し指摘されてきたことである。しかし新しい説教師たちを取りまく状況が特徴として示すのは、「俗人」とウラマーが対抗するのではなく、共存しているという点である。複数のイスラムが存在しつつ、それぞれが市場の独占を狙い競争するのではなく、個別の得意分野を持ち、その領域で動くことによつて、棲み分けを行う傾向が見られるのである。

新しい説教師たち

衛星放送やインターネットなどの新しいメディアがこうした説教師たちの活動する主たる舞台である以上、彼らの動きはひとつの国という単位で捉えきれぬものではない。ただ本論では議論の幅を限定し、エジプト社会という文脈のなかで論じてみたい。というのは、第一にいかなるメッセージも、それが発せられ、かつ受けとられる社会的、文化的な背景なしには、意味を特定しえないからである。またエジプトにはアズハルというウラマー集団を統括するような組織があり、ウラマー一般について論じることがある程度は可能であるということもまた、考察にあたって重要な意味を持つ。ここでは、「近代化」、「世俗化」、「イスラム復興」といった概念で説明されてきた近代エジプトの流れのなかに彼らを置くことによつて、彼らの活躍が持つ意味を考えてみたい。

新しい説教師たちのなかでも、アムル・ハーレド（一九六七—

の知名度は群を抜いている。たとえば、二〇〇六年にはニューヨーク・タイムズ・マガジンが世界的に影響力を持つ人物百人の一人に彼を選出し、「世界でもっとも有名で影響力のあるムスリムのテレヴァンジェリスト」と評価した。すでにマイツズ・マスワード（一九七八）やムスタファー・ホスニー（一九七八）など、彼の後継者と目される新しい世代も登場している²。いくつかの研究書ですでに彼についての言及がなされており、アラビア語では彼に関する著作も複数出版されている³。

アムル・ハーレドが説教師として宗教という畑に身を置いていることを考えると、彼から受ける印象が、古風な服装に身を包み独特な威厳をもって語る典型的なウラマーのイメージとあまりに違うのには驚かされる。ハーレドは衛星放送やインターネットといった新しいメディアを見事に使いこなし、英語を自在に操る。いつも流行の最先端といったスーツに身を包み洗練された物腰で、柔らかい口調で語りかける。腕には高級ブランドの時計を着け、自分が社会的に成功者であることを隠さない。彼は一見したところ、やり手のビジネスマンにしか見えないのだ。同じ「俗人」の宗教家といっても、かたくななまでに伝統的な衣装に身を包み、それによって西洋的な文化一切を拒む意志を示そうとするかのようなオサーマ・ビン・ラーディンとは対照的だ。

一九六七年生まれのハーレドは、世代的にはサダトによる経済開放政策の世代と言つていいだろう。一九五二年の革命の立役者、アラブの指導者として名を馳せたナセルのカリスマ性も知らなければ、一九六七年の第三次中東戦争における惨敗の衝撃もこの年に生まれた彼の記憶にはあるはずがない。彼が物心

ついたころのエジプトでは、アラブ社会主義はすでに事実上放棄されていた。大量の外国資本が流入し、エジプト社会にはそれまでになかったほどの経済格差が生まれた。経済的な繁栄というよりは、土地改革を行うなどできるかぎり貧富の差をなくすことを目指した「社会主義」の時代は終わっていたのである。

ハーレドの家族はこの変化から恩恵を受けた階層と言つていいだろう。父親は大統領府付きの医師であり、母親は元首相の孫であるという。生まれはアレキサンドリアだが、ハーレドが育つたのはムハンディーンというカイロの高級住宅地だ。彼がかなり豊かな、そして社会的に影響力を持つ家の出であることは明らかだ。一方、宗教に関していうと、無関心ということではないにせよ、両親ともにとくに熱心であるとか、厳格であるというわけではなかったらしい。彼自身、十六歳まではまったく礼拝をしていなかったという⁴。彼の周辺には、宗教に関して彼を指導してくれるような人物はいなかったようだ。

その後、彼はエジプトを代表する大学であるカイロ大学の商学部を卒業し、KPMGというオランダを本部とする大手の会計事務所勤務していた⁵。失業率が非常に高く、大学を出ても学歴に見合うような職に就くことが難しいエジプトの状況を考えて、彼の経歴は非常に恵まれたものと言わざるを得ない。

その彼がある内輪の席で宗教について話したことが評判になり、それをきっかけに方々から話を聞かせてほしいと声がかかってくるようになる。こうして会員制のスポーツクラブなどで話すようになり、一九九八年には説教師の仕事に専念する。その後さらに説教師として名を上げた彼はあるモスクで話すようになる

が、彼の話す日は周囲の道路が渋滞するほどの盛況だったとい
う⁶。

現在は、国内外で講演するだけでなく、著作やビデオテープ、
DVD、カセットテープなどの媒体を通してメッセージを発信
することも続けている。ただ、なんといつても重要なのは、衛
星放送とインターネットというメディアだ。インターネット上
に公開された彼のホームページのアクセス数の多さは、個人の
ホームページとしては稀なほどである⁷。これに関して確認し
ておきたいのは、彼の支持者がこうした新しいメディアを身近
なものとし、それを使いこなす人々だという点である。こうし
たメディアに自由にアクセスするのに十分な経済力を持つこ
と、さらにそうしたメディアを通して情報を使いこなす力を獲
得していることがハーレドの支持者の特徴なのである。

ではいつたい、ハーレドが発信するメッセージとはどのよう
なものなのか。彼が訴えるのは、究極的にはイスラム共同体の
再生であり、その意味では、これまでさまざまな形で展開され
てきた覚醒運動、改革運動と比べてとくに新しいところはな
い。自分たちの生きるエジプト社会に働きかけることから始
め、その先にイスラム教徒すべての覚醒を見せるというスタ
ンスだ。

ただし、ハーレドの言うイスラム共同体の再生が、一人ひと
りの意識のレベルに還元される問題として論じられていると
いう点は重要である。なるほど彼は宗教的高揚感に浸るのでも
なく、自己の精神的救済に満足するのでもなく、イスラム教徒
として社会のたけに行動せよと人々に訴える。しかしこのよう
に社会への働きかけのなかでイスラムを論じながら、彼はムス

リム同胞団のような組織化を行おうとすることもなければ、政
治権力を目指すこともない。その点で彼はいわゆるイスラム主
義の組織の指導者とははつきりと異なる方向性を示している。

では、具体的にはハーレドはどのような論法を展開するの
か。彼は自分の目指す改革の方法を「信仰による成長」(al-tamniya
bi-l-Iman)と呼ぶ。これについても少し詳細に見てみよう。
二〇〇五年、ドゥストゥール紙に掲載された「ハッジと信仰に
よる成長」という彼の文章が参考になる。かなり長い文章なの
で、その一部のみを以下に引用する。

「神に祝福されたハッジ巡礼の恩恵は、天国以外のなもの
でもない」…「ハッジ巡礼を行い、猥褻な行為をせず、不道徳
な行為をしない者は、母親が彼を生んだ日のように、(そうし
た罪から)離れている」…「アラファの日ほどに、神が人を解
放する日はない」⁸。

これがハッジ巡礼の恩恵であり、神がハッジ巡礼を行う人間
に約束したものだ。これこそ最後の審判の日に神の御前に立つ
際にハッジ巡礼がもたらす効果である。天国、罪の許し、そし
て地獄からの解放。

しかし我々の現世での生活、今の状況、我々の共同体の未来
に対してハッジ巡礼が持つ影響は何なのかという問いは残る。
社会を改革し、成長を実現することに関して、ハッジ巡礼はな
にか役割を持っているのだろうか。

私には確信がある。イスラムにおける崇拜行為 (ibada) は
元来、人々の現実を改革することを目的としていると。なぜな
ら神は、我々の崇拜行為など必要としてはいないからである。

そうではなく崇拝行為は、それが解き放つ精神的な力、信仰心をもつて、社会を成長と改革の方向へ突き動かすのである。崇拝行為の恩恵（の大きさ）は、社会がその崇拝行為をどの程度役立てるかによる。崇拝行為の持つ恩恵が大きくなれば、その崇拝行為の背後にある社会の成長のための恩恵も同じだけ大きくなるということを私は知っている。

この理解によれば、ハッジ巡礼はイスラムにおいて最も大きな恩恵を持つ崇拝行為である。なぜならば、社会改革のために役割を果たす最大の機会を毎年、何百万もの巡礼者に与えるからである。改革という作業においてハッジ巡礼が持つ役割に關し、いくつかの例を、ごく限られた点についてだけ挙げさせてほしい。

・ハッジ巡礼は、共同体にとつて、包括的な形で行われる思想的な集会となる。数百万人がともに集う希有な機会である。巡礼者は「ミナー」（の地）に三日間滞在するが、娯楽施設も何もないところでともに腰をおろしていながら、共同体の未来のために考え、構想を練らずにいることなどありえようか。

（中略）

・ハッジ巡礼と規律……ハッジ巡礼にはだらしなさや怠惰さの入る余地はない。なぜなら怠慢や無精といった過ちを犯せば、最後まで、同行のグループからはぐれ、道に迷うという大きな代償を払うことにもなりかねないからである。厳格な規律、それこそが我々アラブの社会に欠けているものであり、それがために改革の試みは失敗してきたのである。

ハッジ巡礼があなたを鍛えるいくつかのポイントはこれだ

……思想、統一性、道徳、自由、重労働、規律。これらはみな、いかなる改革、成長の作業にも欠かせない価値であり概念である。

ここから私たちは、信仰による成長という考え方を主張する。イスラム教徒であれ、キリスト教徒であれ、世界のなかでこの地域に生きる人々について言うと、信仰ほどに彼らの能力を発揮させるものは他にない。信仰とは、この地域の人々が持つ感情の構造にとつて基盤となるものなのだ。ただ私たちは、それが成長と改革を守る信仰であることを望んでいる⁹。

要するに、ハーレドの言う「信仰による成長」とは、神への信仰心が人を崇拝行為の実践に駆り立て、その結果として精神的な鍛錬や発展を経験し、それが最終的に社会の発展にもつながるといふことだ。重要なのは、ハーレドが法や規範ではなく、信仰という側面からのみイスラムを論じ、それを道徳心に結びつけている点である。共同体の未来という公的な性格を持つテーマであっても、それを政治的な問題としては捉えないことにより、いわゆる政治化したイスラムとの違いが浮き彫りにされる。また、専門的な訓練を受けた者、つまりウラマーに期待されるイスラム法解釈の領域にも踏み込まないことによつて、ウラマーとの差別化が意図されていると読むこともできる。

理解者という位置取り

ハーレドのような説教師たちに共通する特徴は、聴衆に対し

て自らを身近な存在として提示するという点だ。たとえば、説教が行われる時の様子はどんなものだろうか。彼らは伝統的な説教師のように、高い場所から聴衆を見下ろしながら話すことを好まない。悔い改めるよう恫喝することもなければ、難解な用語を使って聴衆を煙に巻くこともない。話すアラビア語も、コーランやハディースを引用する個所以外は、人々の生活に密着したエジプト方言のアラビア語だ。表情ゆたかにジェスチャーを交え、まるで家族や友人に語りかけるように親しげに話す。取りあげる事例も、聴き手が自身の経験をふと思い出すような身近なものが多い。

さらには、自分が一方的に話すのではなく、何らかの形で聴衆の側が語る機会を作り出すというのも重要だ。ハーレドは時に、聴衆の間に入り、躊躇する人を前に、微笑みながら「さあ、どうぞ」と自分の体験を語ることを促すことがある。理解しあい、共に生きるという感覚を、聴き手と自身の間に、そして聴衆の間に築きあげようというのである。若者と肩を組み、はつらつとした表情で写った写真を多く公開しているのも同じ意図だろう。またハーレドのホームページには、訪問者が自由に書き込める「対話の広場」というフォーラムが用意され、実際、訪問者の間にバーチャルな共同体と言えるようなものができるあがっているようだ。

ここで、ハーレドに影響を受けたある青年のインタビューを紹介しておきたい。カイロ郊外のヘリオポリスにあるスポーツ・クラブで行われた彼の「勉強会」に参加しているということから、この二十一歳の青年も一定以上の階層に属することは明らかである。

(十八歳の時にハーレドに出会って以来、)僕は劇的に変わりました。(それまでは、)とても浅はかで、デートをしたり、よからぬ場所に入入りしていたのですが。その(ハーレドの)勉強会(のテーマ)は信頼についてでした。僕はとても感動し、勉強会の後、ハーレドに会いに行つたんです。そしたら兄のような暖かさで僕を迎えてくれました。そして大切なことを教えてくれました。良きムスリムであるためには、人生に成功し、生産的でなければならぬのだと。そこで僕は勉強し、今は学校を卒業して、懸命に働いています。親から奪つてしまつた一万ポンドを返すためにね(笑)。両親はあのバカ息子がこんなに変わってしまったのを信じられないでいるんです¹⁰。

この青年のことばで注目してほしいのは、ハーレドが「兄のような暖かさで」彼を迎えたという点である。彼は近づきがたい偉大な指導者のポーズをとり、有無を言わせぬ態度で青年を圧倒したわけではなかった。彼は聴き手の前に理解者として立ち現われる。

ムスタファー・ホスニーと並んでハーレドの後継者のひとり目されるのは、ムイツズ・マスワードである。ハーレドより十歳以上若く、芸能人顔負けの華やかな雰囲気を持つこの人物は、ハーレドよりもさらに従来の宗教関係者のイメージから離れている。子供時代はクウェートのアメリカン・スクールへ通い、その後はカイロ・アメリカ大学を卒業するというように、教育背景はみごとにアメリカ式だ。話す英語は極めて流暢で、アラブ人にありがちな強いアクセントはまったくない。

バスケットが得意で、自らロック・バンドも組むというように、生活スタイルや好みにおいてもアメリカ文化の申し子と評している。彼が学生時代にモスクに通い始めたとき、それだけで親は急進派イスラム主義組織に関わり始めたのではないかと心配をしたというから、彼の家庭もまた、あまり宗教的な雰囲気はなかったのだろう。今のところハーレドほどの知名度はないが、若い階層に限って見ると、その影響力はかなりのものがある。

マスウードも、基本的にはハーレドと同じ路線を行く。身近なテーマをとりあげ、自分自身の体験を織り交ぜて話すのも同じだ。たとえば、結婚前の男女交際の是非について、マスウードは次のように話す。結婚前の性的関係は絶対に許されないと強調しながら、その後の生活がうまくいくには両者が結婚する前によく理解し合っていることが不可欠であり、そのために交際は必要だと断言するのだ。自分と妻の出会いを紹介することも忘れない。こうした発言は、婚約していない限り未婚の男女が二人きりで会うこと自体が問題視される社会では、かなり思い切ったものだ。聴く者にとつて切実な問題が日常感覚から離れることなく、しかしコーランやハディースを引用しつつイスラムの粹踏みのなかで議論されるといふ点は重要である。

さらに重要なのは、彼が放蕩の限りを尽くしていた学生時代の話から始め、繰り返し自分の回心体験を語るという点だ。酒を飲み、麻薬に手を出していた彼が、友人の事故死、自らの大病といった経験を経て、次第に人生について考え始める。決定的だったのは、ある盲目の友人との出会いだ。その友人は、盲目という大きな障害を持っているにも関わらず神への感謝を

忘れることがない。この人物と出会うことよつてついに回心を体験するという彼の話は、聴く者の心を動かさずにはおかない。宗教に関心を寄せながらも、ただためらうだけで最初の一步を踏み出せずにいる若者を前に、かつては自分も同じところ、いやそれ以下のところにいたのだというメッセージをマスウードは送る。そうすることによつて彼は、ともに歩もうと呼びかけるのである。

重要なのは、ハーレドやマスウードは聴き手に親近感を持たせ、そこにいる者の間に緩やかな仲間意識を作り出すのであつて、厳格な忠誠を要求するのでもなければ、何らかの組織への帰属を求めるわけでもないという点である。彼らは宗教について語り合う開かれた場を創り出す。同じような問題を抱え、同じような言葉使いをする仲間の存在を実感させ、それによつて、自分ひとりの問題と思われたことが、実は開かれた場所に投ずるに値する問題なのだと思得させていく。

こうした取り組みが的を射ていることは、インターネット上のイスラム関係のフォーラムで取り交わされる言説を見てもわかる。というのは、そうした場では「私の理解するイスラム (al-islam al-hadi' afhamuh)」、「私の見方におけるイスラム (al-islam fi ra'i)」といふような表現が当たり前のように使われるのだ。こうしたフォーラムに参加する人々にとつて、専門家の権威ある見解とは別のものとして、イスラムについて自分自身の考えを持つこと、そしてそれをサイバースペースという半ば公的な空間に投ずることが自然な行為となつている。

社会におけるウラマーの位置

しかしまだ問題は残る。スタイルが違うとはいえ、公的な空間でイスラムについて語るといふのであれば、こうした説教師のしていることがウラマーの仕事と重なってくるのは当然だ。このことを、人々はどう捉えるのだろうか。彼らがウラマーではないとされるのであれば、その事実はどういう意味を帯びるのか。そして当の説教師たちはこれをどのように考えているのだろうか。

この点に入る前に、ひとつ明らかにしておかなければならないことがある。それは社会におけるウラマーの位置だ。まず確認しておきたいのは、ウラマーは厳密な意味では「聖職者」とは言えないという点である。彼らには一般の信徒にはない特別な力があるとされているわけではなく、たとえば罪を許すこともできないければ、「破門」する力もない。またウラマーは「叙階」されるわけでもなければ「得度」するわけでもなく、ある人物がウラマーであるか否かを客観的に判断する基準は存在しない。

ウラマーが一般の信徒と区別されるとすれば、その理由は、原則的には彼らがイスラム教徒として知るべきことを、より多く、より正確に知っているという点に尽きる。「ウラマー」という語は、「知識を持つ者」を意味するアラビア語の普通名詞だ。「知識」が意味するのは、まずコーラン、ハディースに関する学問であり、さらにイスラム法をめぐる学問、そして神学がくる。それらの学問とは、近代西洋から新しいタイプの学問が採用される以前のイスラム教徒の世界では、まさに学問その

ものであつて学問の一領域ではなかった。それ以外の類の学問など存在しなかつたのである。

だとすれば、近代以前の社会では唯一無二の知識人として、ウラマーの存在は一般信徒の生活の細部にまで行きわたり、その使命が日々の生活の中で日常的に確認されていたとしても当然だろう。人々から正しい判断を求められ、知識の伝授を期待され、ときに民衆の代表として政治権力との間に立ち交渉を行う者は、彼ら以外になかつた。しかし時代が下つて強大な中央集権国家が出現し、近代化政策がとられることによつて状況は大きく変わる。ウラマーは「知識を持つ者」、つまり一般に知識人というのではなく、特定の領域の専門家として規定しなおされ、当然の結果としてその役割も限定されていく。

エジプトでウラマーを養成する教育機関と言えば、なんともいってもアズハルである。大学に改組される以前のアズハルの歴史は西暦十世紀までさかのぼるが、十九世紀末のムハンマド・アリーの時代から始まった中央集権化、近代化の波は教育の分野にも及び、アズハルをも放つてはおかなかつた。徐々に政治権力による介入が始まる。決定的であつたのは、ナセルの時代、一九六一年に行われた変革であろう。医学部や工学部が加えられて一般の大学と同じ組織に改編されることにより、ウラマーを育てるプロセスにおいてこれまでにないほどの高度な制度化が実現したのである。それまで師匠と弟子というパーソナルな関係を軸としていた教育の場に、入学資格や修業年限、学位についての規定というシステムが導入された。エジプトのウラマーには、その資格を問う客観的な基準となりうるものが生まれたといいだろう。

もう一点重要なのは、ウラマーの生活を経済的に支えていた寄進財産が宗教省の監督下に置かれたという点である。ウラマーは事実上、公務員となつていく。これについては、国家のコントロールの下で、ウラマーが自律性を失つていく過程と見ることもできる。しかしながら、ウラマーの全面的敗北という解釈は間違つている。なぜなら、いわゆる世俗的教育を受けた者とは区別される形で、アズハルを出たということが宗教の専門家として認められる公的な資格となり、宗教に関する責任者という資格を独占的に認められたという側面も存在するからである。また、宗教省の任命を受けて専門的な職に就くようになったということは、見方を変えれば逆風のなかで一定の職域を確保したということでもある。

さらに国家権力との関係に言うとき、ウラマーが一方的に国家に従属するというわけではなく、国家がウラマーに依存するという部分もある。ウラマーをコントロールしようという強い意志を国家が示すのは、ウラマーによる政策の承認を必要とするという政治権力を持つ者の側の事情があるからである。ナセルのアラブ社会主義の時代に「社会主義」にイスラム的承認を得ることが求められ、後にサダトの時代には急進的イスラム主義陣営からの体制批判に対抗すべくウラマーのサダト体制へのサポートが求められる¹¹。ここで確認しておきたいのは、どちらが優位に立つにせよ、ウラマーと国家権力は切り離せないものとして人々の目に映るということである。

この点について、ハッシュャーブとガーニムという二人の研究者が行った調査を参考に、一般市民や学生の意識を見てみたい。念のために付け加えておくが、二つの調査は民衆の持つウ

ラマー観を明らかにすること自体を目的としたものではない。ハッシュャーブの調査は、イスラムのさまざまな潮流に対する大学生の意識を調査したものであり、ガーニムの調査は宗教言説のあり方に対する一般人の問題意識を明らかにしようとしたものだ。ただエジプトの場合、社会調査の実施自体が容易ではなく、これらの調査は人々のウラマー観を探るための貴重な材料となつている。

ガーニムの行つた調査の結果は、「エジプトにおける宗教的言説の刷新——一般市民からのサンプルの意見分析」という論文にまとめられている¹²。この論文は、さまざまな立場の人物による宗教的言説に対して一般市民が示す反応をもとに、エジプトにおける宗教言説を取りまく問題を説明しようとしたものだが、本論にとって重要なのは、「宗教的言説」の担い手となるべきなのは誰かという問いに対する回答である。もちろん回答は、宗教的言説とはなにかというそれに先立つ問いへの答に連動する。つまり、宗教的言説とはコーランやハディースといった宗教テキストに依つて立つ言説であると限定的に捉えた人は、宗教的言説の担い手にいわゆる「公的 (rasmi)」な地位を求め、そうではなく、宗教的言説を生き方についての考察というように広く捉える人は、そうした地位とは関わりなく誰でも担い手になってよいとしている。ただここで注目したいのは、そうした見解の違いではなく、どのように回答するにせよ、「公的」地位という概念が問題なく使用されているという事実である。公に承認された宗教の専門家というものが、ひとつのカテゴリーとして捉えられていると理解していいだろう。

もう一つの調査は、ハッシュャーブの「現代エジプト社会にお

ける青年とイスラムの流れ」という研究で行われたものである¹³。一部のイスラム主義組織の急進化という時代背景のなかで、カイロ大学の学生四五〇人を対象に、若い世代の宗教意識を解明することを目的としている。

この研究では、イスラムは次の三つのタイプに分類され、それぞれについてどのような評価や印象を持っているかが問われている。三つのタイプとは、制度的イスラム (Islamic movement)、スーフィー的イスラム、そして最後に政治的イスラムである。ここから言えるのは、社会の構成要素というレベルでイスラムを論じるために挙げられているこの三つのタイプのイスラムは、そのどれもが回答者にとつて容易にイメージすることができるといえるほどに馴染んだカテゴリーだということである。

「制度的イスラム」とは、「アズハルとワクフ省が代表し、このタイプはアズハル学院のネットワークと数多くのモスクを監督下に置く」と定義されているが、こうしたタイプのイスラムが一つの実体として人々に捉えられているということなのだ¹⁴。スーフィーたちのイスラムとも異なり、イスラム主義者が体現する政治的イスラムとも異なり、公のお墨付きを受けた教育課程を修了し、イスラムの専門家として国家に承認された職に就いている人々のイスラムがひとつのイスラムとして括りだされている。

繰り返しになるが、「公的」と呼ぶにせよ「制度的」と言うにせよ、回答者は政治権力による承認を受けた宗教の専門家を明確な輪郭を持つ集団と捉えているという点を確認しておきたい。伝統的な見方によれば、知識の量や正確さこそがウラマーと認められる基準となるのであろうが、すでに触れたよう

な歴史的経緯を経て、現代のエジプトの人々にとつては、国家権力との近接性がウラマーのメルクマールとなつていことはどれほど強調しても足りないほどである。

では、こうしたウラマーを一般の信徒はどう見ているのだろうか。第一に挙がるのは、距離感だ。人々がウラマーの背後に国家権力を見るとすれば、その副産物と言つてもいいだろう。ガーニムの調査を見ると、アムル・ハーレドのような説教師の言説が理解しやすく心に響くと高く評価されるのに対して、「公的」地位にある人々の言説については評価が低いことがわかる。理由の一つとしては、「公的」地位にある人々が使うアラビア語が、平均的なエジプト人にはわかりにくい非常に硬いアラビア語だという言語の問題があるだろう。アラビア語には地方ごとによつて異なる口語のアラビア語と、コーランのアラビア語に近い正則語と呼ばれる硬いアラビア語の二つが存在するが、ウラマーが使うのは、通常、正則語の方だ¹⁵。ウラマーのなかには、さらに意味伝達には不要と思われるような修辭を用い、特有の言い回しを使うことによつて、「ウラマーらしさ」を創り出しているかに見える者もいる。教育の過程で自然に身についたのであろうか。それとも、ウラマーであることが一般の信徒とは異なる特別な専門家であることと認識されているがゆえに、こうした演出による差別化に向かうのであろうか。どちらにせよ、ハーレドやマスウードが示す身近さの演出とは正反対の傾向である。

とはいえ、ウラマーは時代遅れの無用の存在とみなされているというわけではない。たとえばハッシュヤープの調査では、アズハルはその宗教的使命を果たしていると回答した者の方が、

果たしていないとした者よりもはるかに多い¹⁶。また先にも記したとおり、ガーニムの調査では、宗教的言説をコーランやハディースに関する言説と限定的に捉えた場合、その担い手は「公的」地位を持つ者、つまりウラマーであるべきだと考える者も少なくなかった。

では次に、人々がウラマーに期待するのは何なのだろうか。ウラマーはどのような役割を果たすべきと考えられているのだろうか。ここでは裏返して、ウラマーに対する批判を先の調査から具体的に取り出してみよう。なぜならそうした批判は、まず最初に人々がウラマーに寄せている期待というものがあり、それが満たされないことによつて生まれるものだからである。

ハッシュャーブの調査ではウラマーの牙城であるアズハルに關し、全体の八九・一%が「アズハルは変わるべきだ」という見解を示しているが、変わるべき具体的な点としては数の多い方から挙げると、七五%が「もつと効果的に社会問題に取り組みべき」とし、ついで五二・五%が「科学と宗教をつなぐべき」としている。またガーニムの調査では、ウラマーは失業、物価高、若者の道徳心の低さなど、人々の生活にとつて切実な問題を充分に取り上げていないという批判がなされている。だとすれば、ウラマーにもつとも求められているのは、こうした社会的な問題の解決に貢献することということになる。物価高や高い失業率といった問題に關して言う限り、具体的には解決に向けて政治権力に働きかけることが期待されているということであろう。

以上をまとめると、次のようになる。現在の「公的」あるいは

は「制度的」イスラムは、人々の日常に寄り添い、精神生活の細部にまで浸透しているとは見られていない。ウラマーは人々の日々の現実を理解していないという批判も生まれる。しかしその一方で、長い歴史のなかで積み上げられてきたコーランやハディースに關する知識を保持し、さらにはそうしたイスラム的な知の守護者として政治権力と向きあい、社会全体のイスラム性を確保することができているのは、まさに「公的」、「制度的」イスラムを体現するウラマーしかないとされているのだ。つまり、ウラマーには一般の信徒にはない特別な権威があると承認されつつも、その権威がゆえに期待されるウラマーの社会的使命は、政治権力との交渉という人々の日常からは遠いところに置かれるのである。

求められる繋ぎ手

ウラマーと一般信徒の間に距離があるとすれば、両者を繋ぐような働きをする人々が求められるのは当然だ。抽象的な概念を振りかざすのではなく、わかりやすく言い換え、具体的な状況に合わせて解きほぐしてみせる人材が不可欠になる。たとえばウラマー集団の末端に位置する、村や町の小さなモスクのイマームのような存在はその典型だろう。一九六五年から一九八六年まで数回にわたり、ヨルダンのある村で調査を行ったアントウンという研究者は、その村のモスクのイマームを選ぶ際に村人が最終的に基準としたのは、村人の生活や人間関係を熟知しているか否かであったと報告しているが、この事実

はこうした仲介者の役割に対する人々の意識のありかを示している¹⁷。こうした人材が確保されることにより、一般論としてのイスラムではなく、村人にとつて意味のあるイスラムが生み出される。村で発生する具体的な問題を取り上げ、それを丁寧なイスラムの枠組みのなかにはめ込んで見せることで、イスラムは村人の日々の生活にとつて有意義なものとなる。

こうした仲介者が今のエジプトにいないということではない。たとえば、専門的な教育はまったく受けていないものの独学でコーランを学び、シェイフあるいはシェイハと呼ばれ町内の人々の尊敬を集めている人物の例などは珍しくない。しかし少なくとも、ハーレドやマスウードの支持者、つまり経済的には上昇気流に乗り、欧米文化に浸ってきた人々に關して言う限り、彼らの周囲にはこうした仲介者の役割を果たしてくれる者がいかなかったのではないか。不在ではなかったにせよ、圧倒的に不足していたのではないか。

たとえば、欧米の文化とイスラムの規範の關係について自らの見解を語ってみせるウラマーはいただろう。しかし実際にロックを演奏し、バスケットというスポーツの楽しさを知った上で、イスラムの見地からその是非を語ることはなかったのではないか。ハーレドやマスウードの支持者からすれば、自分たちのことをよく理解していると実感できる人物の口からイスラムについての真摯な語りが出ることなど、考えられなかったのだろう。

ハーレドやマスウードに対して一体感を持つ人々の多くは、欧米的な生活様式を持ち欧米の文化に親近感を持つがゆえに、これまでイスラムから距離があると考えられていた人々であ

る。もしもイスラム的であるということがすなわち文化的に反欧米の傾向を示すことだといふのであれば、彼らがそうした意味ではイスラム的になりえなかったとしても不思議でもなんでもない。しかしそうしたイスラム理解が一部の党派的な見方に過ぎないのはいままでもないだろう。新しい説教師たちは、欧米の文化的産物に親近感を禁じ得ない人々のために、社会上層に位置する人々のために、彼らのニーズに合わせてカスタマイズされたイスラムを提示したのである。

たとえばハーレドの「信仰による成長」というスローガンも、こうした点から読みかえることが可能だ。つまり、経済的に恵まれていふこと、成功者であることが宗教的な文脈で積極的に意味づけようという試みと解釈することができる。彼の若い支持者にとつて、平均的な同世代の人間と比べて自分にははるかにはるかに明るい未来が約束されているのは明らかだ。ともすれば特権階級としての罪悪感を抱くことにもなりかねない。しかしもしハーレドが言うように信仰が成長を呼ぶというのであれば、逆に言うところ、成長や成功は信仰の賜物であるといふことにもなる。ここで思い出してほしいのは、若い支持者に対し、ハーレドがよきムスリムであるためのアドバイスとして、「人生において成功し、生産的」であるようにと言ったという点だ。

重要なのは、彼らはあくまで繋ぎ手であり、ウラマーの提示するイスラムを否定し、それを自分たちの解釈するイスラムに換えようとしているわけではないという点である。すでに触れたとおり、意図されるのは棲み分け、役割分担だ。たとえばハーレドの場合、自分の基本的な方針を「三つの否」といふ言い方で示しているが、そのひとつとして自分とウラマーの違いが明

言される。彼はこう言う。「一、ファトゥワーへの否。自分はウラマーではないので、ファトゥワーを出す資格がない。私は説教師であり、それが私の使命の境界線だ。二、政治への否。私には政治のための時間はない。三、党派に属することへの否」と¹⁸。

ファトゥワーとは、一般信徒から寄せられた問いに対し、イスラム法学の知識を持つ者がイスラム法に照らして自分の見解を出すものだ。「法的見解」と訳すこともある。重要なのは一般的に言つて、ファトゥワーとはウラマーが社会に影響を及ぼす最も有効な手段だという点である。ハーレドは、自分にはそれを出す資格がないと言う。つまり、ウラマーの権威に挑戦するようなことはせず、権威ある解釈を下すことができるのはウラマーだけであると認めたくらんで、コーランやハディースを読み、その意味を考えるとという行為自体は、すべてのイスラム教徒に開かれているとするのである。こうしてハーレドは、意識的に自分の領域をウラマーのそれとは別のところに置く。

再度確認しておきたいのは、ウラマーではないと宣言することが彼の支持者にとつてまったく負の意味を帯びないということだ¹⁹。専門的な教育を受けておらず、専門家としての承認も受けていないという事実が確認されても、つまりウラマーの持つ権威を彼は持たないということが明言されても、それによつて職業的な説教師としての彼が支持者を失うことはない。要するに、ハーレドのような説教師たちはその権威によつて人々をひきつけるのではないのだ。ウラマーのなかには歴史に名高い学院で学んだ学歴や著名なウラマーに師事した経歴を誇らしげに掲げる者も少なくはないが、ハーレドたちはあたか

も意識的にその逆を行くかのようだ。なぜならば、彼らが支持されるのは、それまでイスラム的言説の外に置かれていた、あるいは少なくともそのようなように感じていた人々に「身内」として自らを提示し、内側から語りかけるからである。これまでイスラムの枠組みでは語れないと考えられてきた問題をイスラムにつないで見せ、あるいはイスラム的にはなんら評価されないとみなされてきたものをイスラムの文脈で意味づけてみせたことが、人々の心を捉えたのである。

ハーレドは、社会的成功者であることをイスラム的に意味づけ、それと同時に、豊かな者の果たすべき社会的責任をも自覚させる。またマスウードは、あるロック音楽の歌詞を取り上げ、そこに出てくる恋人に対する深い愛の表現を神への愛に移しかえてみようとする。こうしていつのまにか、ロックという西洋起源の音楽がイスラム的言説に取り込まれていく。彼らはこれまでイスラム的言説に入り込むことのできなかつた人々に、レファレンス・ポイントとなるような言説を提供していると言つていいだろう。

「俗人化」、「世俗化」ではなく

エジプトの歴史を振り返ると、十九世紀末からの近代化政策、とりわけ世俗的教育の導入はウラマーとは異なる類の知識人を生み出し、結果的に社会におけるウラマーの居場所を縮小してきた。ダールル・ウルームと呼ばれる師範学校が生まれることにより、教育の場からウラマーは少しずつ退場し、法学校

の登場は、司法の場からもウラマーを排除していくことになった。一般の人々の視点から見れば、ウラマーが持つていた教育の担い手、地域共同体の精神的支柱という側面が後退していく現象と映つただろう。ウラマーが社会における知識人の役割を独占するという状況は終わつた。

ウラマーたちは、イスラム諸学という特定の専門分野を持つ専門家と認識されるようになった。医師や法律家と同じように、特別な教育、訓練を受け、特定の領域で働く者と位置づけられるようになったのである。彼らに期待されたのは、イスラム諸学の専門家として政治権力と交渉し、社会をイスラムの枠のなかに収めておくことであつた。もちろん、こうした役割は新しく生まれたものではなく、歴史を通じてウラマーが果たしてきた役割の一部であつた。しかし一部に過ぎなかつたこの役割が、近代的な中央集権国家が出現し、さらにその国家が「世俗性」を志向するなかで突出してきたとも考えられる。

ウラマーの役割が特定の領域に限定されていくことは、ともすればエジプト社会の「世俗化」とも見えるだろう。しかし、「世俗化」を社会のなかで宗教が影響力を及ぼしうる範囲が縮小していく過程と考えるならば、すでに見てきたようにエジプトではそのようなことは起きていない。起きているのは、ウラマーと呼ばれる人々の職域の縮小、社会的役割の限定化であり、宗教そのものが消えつつあるわけではまづたくない。なぜなら本論で取りあげた説教師たちがそうであつたように、ウラマー不在の空間が生まれれば、それを誰かほかの人間が埋めていくからである。エジプト人のある知人は、小学校の「宗教」の授業でコーランについて教えられる単元が減ると、親たちが協力

し、コーランの知識を持つ親が先生役を買つて出て自分たちの力でクッターブ（コーラン学校）を開いたと教えてくれた。

だとすれば今起きているのは、ウラマー以外の人間がイスラムの担い手として浮上することであり、「世俗化」というよりは「俗人化」とでも呼ぶべき現象である。ウラマーがそこにいることによりイスラム性を保証されていた社会が、今度は「俗人」の手によりイスラム性を（再）構築しようとしていると見ることもできる。

「俗人」の台頭という現象は、イスラムに限らず、近代における宗教一般を特徴づける現象である。しかしイスラムに関してはこれまで、ムスリム同胞団に代表されるイスラム主義組織が見せる現象としてのみ議論される傾向があつた。組織化され、高度に政治化されたイスラムの立役者としての「俗人」が突出して関心を集めていたということである。しかしながらこれまで見てきたように、一人ひとりの人間の生き方、信仰の意味づけなど、個人の内面に関わるような領域においても「俗人」の活躍が目覚ましいのは確かだ。当然のことながら、「俗人」は千差万別である。それぞれに異なる「俗人」のイスラム教徒が自分にとって意味あるイスラムを求めて主体的に動くというのであれば、「俗人化」が多様化につながるのは当然だ。そして見方を換えれば、この過程は、従来のイスラム的言説からこぼれ落ちていた部分をイスラムの枠組みのなかに再統合していく過程とも言えるのである。

注

- 1 Lindsay Wise, 'Whose Reality is Real?: Ethical Reality TV Trend Offers "Culturally Authentic" Alternative to Western Formats', www.tbsjournal.com/wisepf.html (2009.12.03)
- 2 八木久美子、「イスラムの『俗人』スター説教師」『東京外国語大学論集』(七七) 一一七—一二三頁。
- 3 Ramadan Sha'bān, 'Amr Khalīd: shāhid 'alā hijāb al-fannānāt wa i'tizāl al-nujūm, Imbaba, 2007; Sāmīr Khair Ahmad, *Al-khiṭāf hawla 'amr khālīd: mādhā fa'ala taqāṣ al-turāḥ bi-'uqūl al-nās?*, Amman, 2006; 'Iṣām al-Ghāzī, *Hiwārātī ma'a 'amr khālīd min bayrūt*, Dokki, 2003; Qism al-abhāth wal-dirāsāt al-islāmīyya fī jam'iyya al-mashārī' al-khairīyya al-islāmīyya, 'Amr khālīd fī mizān al-sharī'a, Beirut, 2003
- 4 'Iṣām al-Ghāzī' 一〇頁。
- 5 彼は、説教師としての地位を確立した後でイスラム関係の学校に行っているものの、アズハル大学を卒業したというような意味で、本格的にイスラムを学んだ経歴はない。
- 6 二〇〇三年、ハーレドは説教師としての活動を禁止され、国外に出る。当局がいまだに認めていないため真偽のほどはわからないが、一般には、彼の持つ影響力のあまりの大きさを危険視した政府から圧力があり、ハーレドは博士号を取るためという理由でイギリスに渡ったと言われている。とはいえ二〇〇五年には、早くもエジプトに戻っている。つまり、ハーレドには政治的な動きを展開する可能性がないことが確認されたがゆえに国内での活動を許されたのであろう。
- 7 アクセス数の多さを Google のページランクで言うところ七に入っている。七というランクに入るのは、通常、Yahoo や Google などのポータルサイトであることを考えると、ハーレドのホームページへのアクセスがいかに多いかがわかるだろう。
- 8 以上はすべてハディースである。なお「アラファの日」とはハッジ巡礼の数々の儀礼のなかでもっとも重要なものとされる。アラファの荒野でラフマ山上に立ち、神を讃えるウクーフ（逗留）という儀礼をおこなう日のことである。
- 9 ドウストウール紙（エジプト）二〇〇五年一月四日。ハーレドのホームページに転載されたアラビア語原文は <http://amrkhaled.net/articles/articles1219.html>
- 10 'Amr Khaled- Piety for the young and affluent', (二〇〇四年三月十八日に掲載)
- 11 これについては、次の二つの論文が参考になる。Malika Zeghal, 'Religion and Politics in Egypt', *International Journal of Middle East Studies*, 31(1999); Moustafa, Tamir, 'Conflict and cooperation between the state and religious institutions in contemporary Egypt', *International Journal of Middle East Studies*, 32, (2000).
- 12 Ibrāhīm Al-Bayyūmī Ghānim, "'Tajīd al-khiṭāb al-dnī fī miṣr: taḥlīl arā' 'ayyina min al-jumhūr al-'āmm", *Hāl tajīd al-khiṭāb al-dnī fī miṣr*, vol.2, Maktabat al-Shurūq al-Dawīyya, 2006
- 13 Sāmīya Muṣṭafā al-Khashshāb, *Al-shabbāb wal-tayār al-islāmī fī al-mujāma' al-miṣrī al-mu'āsir*, Dār al-Thaqāfa al-'Arabiyya, 1988
- 14 al-Khashshāb' 一四頁。
- 15 エジプト方言で語ることで有名だったシャアラウイー（一九九八—一九九八）は例外的な存在と言っている。

- 16 「完全に果たしている」と見るのは二二・二%、「ある程度果たしている」と答えた者は五八・九%で、両者を合わせると八一・一%となり、圧倒的多数が程度の差はあれ、アズハルが宗教的使命を果たしていることを認めている。「果たしていない」と答えているのは、一七・三%に過ぎない。
- 17 Antoun, Richard T., *Muslim Preacher in the Modern World: A Jordanian Case Study in Comparative Perspective*, Princeton University Press, 1989.
- 18 'Isām al-Ghazī' 一五頁。
- 19 ハーレドは二〇〇一年にカイロのイスラム学院 (maḥad al-dirāsāt al-islamiyya) を修了しているが、この学院はイスラム諸学の本格的な教育を行っているとは評価されてはおらず、さらにここで学んだのは彼が説教師としての地位を確立した後のことである。